

研究ノート

ボランティアを通しての大学生の意識と地域社会貢献研究

宮脇 敏哉

徳山大学経済学部

寺田 篤史

徳山大学経済学部

中嶋 克成

徳山大学福祉情報学部

はじめに

ボランティア活動は大学の社会的貢献の一つである。社会的に重要な組織体として、常に社会に目を向けていなければならない。そして何か発生した場合は、教員と職員、学生と協力して、今何をしなければならないかを判断して迅速な行動が必要である。これを基本として、さらに活動をしたいと思う。このレポートは、徳山大学におけるボランティア募金活動および徳山大学生へのボランティアに対する意識調査アンケートの結果を中心に報告し、今後の研究の足掛かりとするための若干の考察を加えたものである。

1. ボランティアの先行研究

長沼豊〔2008〕『新しいボランティア学習の創造』によると、福祉社会の実現や、より良い社会の模索のための学びの推進の観点からは、福祉教育とボランティア学習が一致している。そしてボランティア体験は、市民性を育むものであるが20歳前後での活動が落ち込んでいる。このことは、学校でのボランティア教育効果がいまだ不十分である可能性を示唆する。

さらに長沼は、民主主義でのボランティア像として「すべての人々の幸福をめざして、自ら考え、自らの意思で社会的な課題に利益を考えず、社会の改善をめざして取り組んでいる」とした。

2. 徳山大学におけるボランティアの考え方

徳山大学は地元の自治体と地域の要請によって昭和46（1971）年、学校法人中央学院徳山大学経済学部として発足した。地元の自治体と産業界、教育界および地域からの要請によって設立された大学であることから、教育研究組織は地域連携、地域貢献に配慮した編制となっている。地元との連携を図り地域貢献を目指す「地域連携センター」、周南地域などの地域経済研究を行う「徳山大学総合研究所」を設置しており、併せて必修授業内にも地域課題解決型PBL「地域ゼミ」を導入し、①教養ゼミ（1年）→②地域ゼミ（2年）→③④専門ゼミ（3・4年）という流れの中に地域課題解決型PBLを4年間の継続的な学びとする体系化を行っている。以下の3・4で報告するボランティア事例も地域連携センターに所属する筆者ら（教員）と、その各ゼミ生有志による取り組みである。

本ボランティアそのものを語る前提として、本ボランティアがどのような類型に当たるのか（あるいはそれを企図したのか）を概観したい。高橋〔2018〕はボランティアの取組について傾向分析を行い、A.世代を超えた交流、B.学校生徒・大学生、C.多機関・団体連携、D.企業の社会貢献、E.地域内、有志の助け合い、F.安全・安心、G.地域外との交流・イベント性、H.社協、行政サービスの一環、I.有償ボランティア形式の9つにタイプ分けを行っている。本ボランティアはこれらの

図表 1. 4 年間の継続的な学びとしての PBL の体系化¹⁾

教養ゼミ	地域ゼミ(新規開講)	専門ゼミⅠ・Ⅱ
1 年次 (必修)	2 年次 (H28 年度より必修)	3・4 年次 (選必(経済)/必修(福祉情報))
【PBL への導入教育】 (PBL リテラシー) a) 情報・文献の収集 b) ディベート・スピーチ・プレゼン	【地域課題による PBL 体験】 a) 課題の発見と解決力育成 b) 地域調査・データ分析・まとめ・発表	【専門知識を活用した PBL】
• PBL リテラシー教育を全ゼミで共通実施。 • 「合同ディベート大会」と「合同プレゼン大会」との開催を定例化。	• 全ゼミでの合同発表会を定例化。 • 必修化に伴い、1 学年約 280 名が 23 ゼミ開講の下で受講できる体制を整備。	• 地域課題のリストを AL プロデューサーと担当教員とで共有化し、卒論指導に活用できる体制を整備。

筆者作成

タイプうち、「B. 学校生徒・大学生」を核とした取り組みであるものの、「C. 多機関・団体連携」の要素も少なからず有している。

すなわち、本教員の呼びかけのもと、学生が主体的に募金活動を行ったという意味では「B. 学校生徒・大学生」類型である。しかし、本ボランティア集まった義援金は、「地域連携センター」や「地域ゼミ」で普段から連携している自治体に寄付を行っており、その意味では活動の端緒は「地域連携」にある。したがって本ボランティアは「C. 多機関・団体連携」の要素も具えるものである。

3. 2017 年のボランティア活動事例

徳山大学宮脇ゼミ・庄司ゼミ・寺田ゼミの発案によって、2017 年 7 月 22 日 11:00 から 17:00 の予定で福岡南部水害支援募金ボランティア活動をおこなった。教員 2 名、学生 35 名(延べ人数)が参加した。本学には、学生のボランティアサークルなどがあり、社会貢献度の高い意識を持った学生が多数在籍している。

気象庁は、「九州北部豪雨災害」と言っているが、風評被害があまりでないように、今回は、「福岡南部水害支援募金ボランティア」活動とした。

大分県日田市も残念ながら被害を受けたが、死者の数の大きかった福岡県朝倉市、その近郊を念頭に募金活動をおこなった。

今回は、山口県下松市のショッピングモール「ザモール周南」様の厚意によってモール 1F の「星ひろば」を使用することができた。11:00 から募金活動に入り、当初は、学生も小さな声しか出ていなかったが、募金活動の経験のある女子学生の積極的な行動によって、徐々に「声かけ」ができるようになった。

多くの買い物客による募金を次々と受け、山口県民の温かさを感じた。こどもや若い方から年配の方まで募金をしてもらった。

16:00 くらいに向かいのお店「レコパン」様からのパンの差入れを受けて、募金の方にパンを提供して、予定の時間を 18:00 に延長して活動した。その結果、募金金額が 160,081 円となった。募金は、160,081 円全額を福岡県朝倉市の比良松中学校に送金した。比良松中学校は、TV 報道により、1F の技術室が流されて大きな被害が出ているとのことで学生と相談の上、寄付した。

今回の募金活動は、学生の社会貢献活動として「だれかのために」何かするという意識向上に繋

がったと思われる。今後も被災地のことを忘れずに「またいつか」募金活動を継続したいと考えた。

4. 2018年のボランティア活動事例

山口県東部水害支援地域貢献として、募金活動をおこなった。西日本豪雨によって山口県東部においても死者が出ており、本学地域連携センター主催による地域貢献活動として、徳山商工会議所の街あい1Fと山本ビル1Fにおいて、募金活動をおこなった。学生20名、教員3名が参加し、多くの市民の協力が得られた。集まった市民のみなさまからの寄付は、15万円を超えた。地域の方々の善意に学生・教員ともに触れることができた。

今回、山口県東部（光市・下松市・周南市）は、たいへんな豪雨水害を受けた。岡山や広島ではもっと大きな被害がでていたが、本学の立地している山口県東部に対する活動を優先しておこなった。

本学地域連携センターの主催で、宮脇ゼミ・寺田ゼミ・中嶋ゼミの学生そして教員が参加して2日間にわたって積極的な募金活動となった。寄付金は、周南市（三丘）に宮脇・浅原（51,501円）、下松市（市役所）に、寺田と学生（52,302円）、光市（周防地域づくり協議会）に中嶋と学生（52,302円）が出向き手渡した。

これまでも地域貢献として熊本地震支援募金活動をおこない熊本の社会福祉協議会へ寄付した活動や福岡南部水害支援募金ボランティア活動（前

述）をおこなってきた。さらに地域貢献として、山口県下松市社会福祉法人を通しての障がい者施設支援募金活動などをおこなっている。これらのボランティア活動を通して学生・教員ともに成長していると思う。

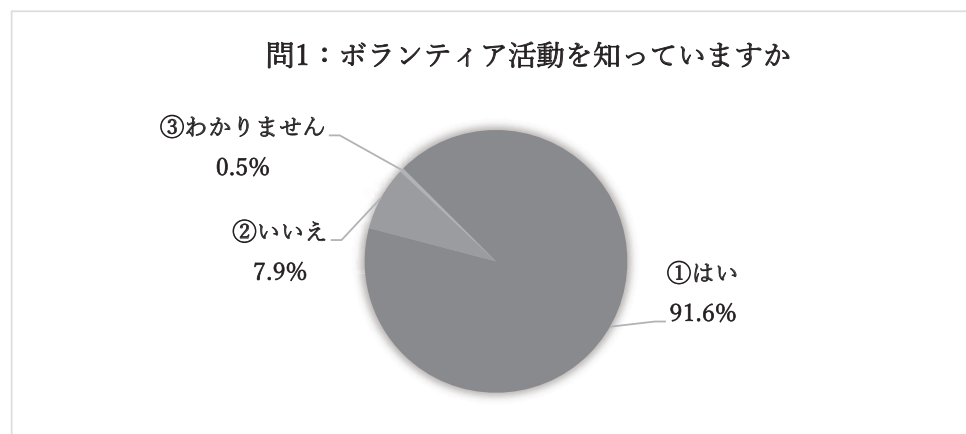
今回の西日本豪雨災害を忘れないようにして、再度地域支援活動をおこなう予定である。

5. 大学・学生にとってのボランティアの意義

では、そもそも大学にとって学生のボランティア活動とはどのような意義を持つだろうか²⁾。2005年の中央審議会答申では、大学の本来の使命を「教育と研究」にあるとしているが、同時に「社会貢献（地域社会・経済社会・国際社会等、広い意味での社会全体の発展への寄与）」の重要性が指摘され、これを教育・研究に続く大学の「第三の使命」と位置付けている。もっとも、原〔2015〕が言うように「大学の社会貢献の内容は幅が広く、明確な範囲を規定しえない」にしても、ここで言われている社会貢献とは「教育や研究それ自体」という「長期的観点からの社会貢献」ないしは「国際協力、公開講座や産学官連携等を通じた、より直接的な貢献」であり、単なる学生によるボランティア活動はおそらく想定されていない。

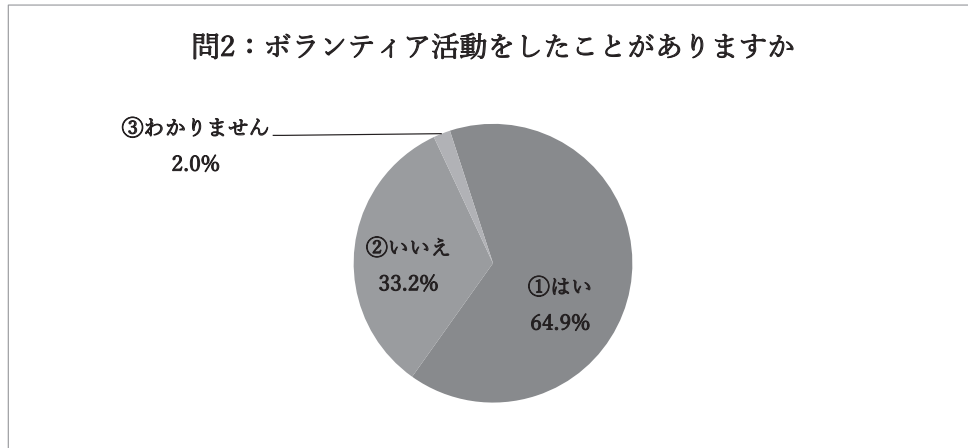
しかし、3・4で報告したような筆者らがしばしば実施している学生ボランティアによる募金活動

図表2. ボランティア活動の認識



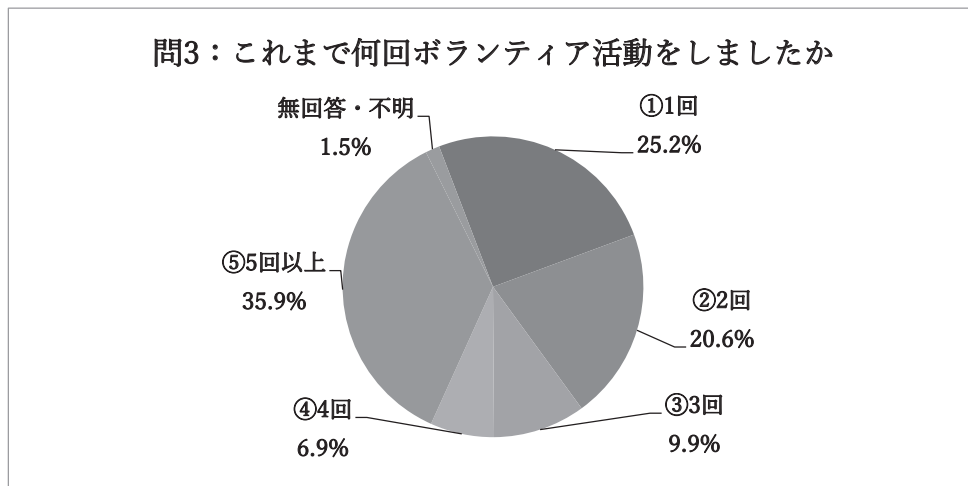
筆者作成

図表3. これまでのボランティア活動



筆者作成

図表4. これまでのボランティア回数



筆者作成

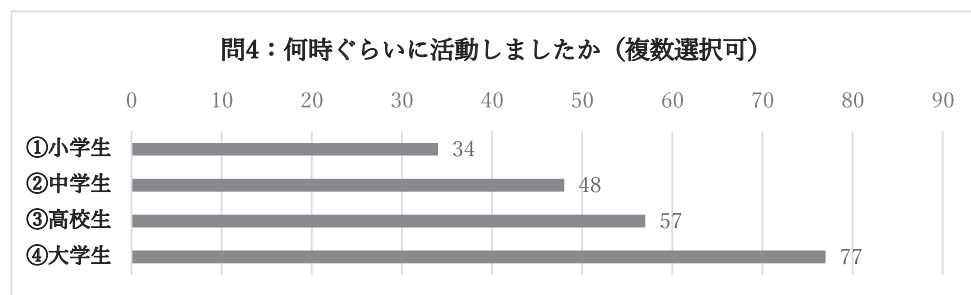
などは、普段から連携している地域企業・団体の協力のもと大学（地域連携センター、地域で活動するゼミ）の呼びかけで実施する形をとっている。このようなボランティア活動は地域と連携した社会貢献活動とみることもできるだろう³⁾。

学生にとってボランティア活動はどのような意味を持つだろうか。今回後述のアンケート調査ではボランティア参加への学生の動機やボランティアを学生がどう意味づけているかについては直接質問していないが、「ボランティアを誰のために行うか」を自由記述で質問している。結果の詳細は後に譲るが、これを意味づけ・動機として読み替えればおおよそ「自身にとって価値がある（ものである・から行ふ）」か「他者にとって価値がある

（ものである・から行ふ）」かに大別できるだろう。

すでに指摘されているように⁴⁾、ボランティア活動は他者を利する慈善行為ではあるものの、動機の観点では自己実現や達成感あるいは自己利益（就職活動に利用するため、授業の一環で単位のためなど）と自身との関連で意味づけがなされる点は注目すべきである。この点について本稿では詳細な分析には至らなかったが、動機や意味づけについても先行研究を踏まえた類型化をしたうえで、さらなる調査を行う必要がある⁵⁾。また、ボランティアの種類も多岐にわたるため、学生が経験したボランティアの内容とボランティア活動への意識の関係も検討に値する問題である。

図表 5. ボランティア活動時期



筆者作成

6. 徳山大学におけるボランティア調査

2018年に講義のなかでボランティアについてアンケート調査をおこなった。回答が202名であった。（10月23日調査）

問1の「ボランティア活動を知っていますか」への回答から、ボランティアに関する認識は高く、185名（91.6%）が理解している（図表2）。「いいえ」が16名（7.9%）いたのは、留学生による回答であると考えられる。

問2の「ボランティア活動をしたことがありますか」は、「はい」（したことがある）が131名（64.9%）、「いいえ」が67名（33.2%）であった。活動例としては、海底清掃、被災地での土を撤去する作業、草刈り、イベントの運営、小学生の遠足の補助などの回答があった。

問3のボランティアを何回おこなったかは、「1回」が33名（25.2%）、「2回」が27名（20.6%）、そして「5回以上」が47名（35.9%）となっており、ボランティアに対する意識が高いと感じた。

問4では、いつ頃にボランティアをしたか回答を得たが、「小学生」34名、「中学生」48名、「高校生」57名、「大学生」77名となっている。小中高時代にこれだけの人数が参加していたことは、予想を大きく上回っている。

おわりに

わが国において、近年多くの災害が発生している。東日本大震災は、未曾有の災害になった。その後も熊本地震や福岡南部水害、西日本豪雨が発

生して多くの犠牲者を出している。このような時こそ学生や教職員が一丸となってボランティア活動をおこなうのが社会貢献である。

注

1. 教養ゼミ・地域ゼミの学生。ゼミの特徴については、図表1。
2. ボランティア活動の意味づけについては、留学生によるボランティア活動に関連してではあるが、松永〔2017〕による地域社会参加とキャリア形成の観点からの先行研究の概括が便利である。
3. 羅・荒木・栗原〔2012〕は、ボランティア活動を大学や大学生による社会貢献・地域連携と位置付けている。
4. 伊藤〔2011〕、広崎・酒井・千葉・風間〔2006〕、橋本・石井〔2004〕などで指摘されている。
5. こうした作業については、学生のボランティアに対するイメージと動機付けの関係を検証する荒井〔2016〕や、多数の先行研究をもとにボランティアへの動機の整理を行っている伊藤〔2011〕などが助けとなるだろう。

〈参考文献〉

1. 長沼豊〔2008〕『新しいボランティア学習の創造』ミネルヴァ書房、3-10頁
2. 庄司一也・寺田篤史〔2017〕「アクティブ・ラーニングは徳山大学をどう変えたか？」『平成29年度大学教育再生加速プログラムテーマI「アクティブ・ラーニング」シンポジウム発表抄

録集』、20-28 頁

3. 高橋和幸 [2018] 「除雪ボランティアを通じた
互助・共助コミュニティの構築に関する研究（そ
の9）」『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』
18、33-48 頁
4. 荒井俊行 [2016] 「大学生のボランティア活動
へのイメージが参加志向動機・不参加志向動機
に及ぼす影響」『日本教育工学会論文誌』40
(2)、85-94 頁
5. 伊藤忠弘 [2011] 「ボランティア活動の動機の
検討」『学習院大学文学部研究年報』58、35-55
頁
6. 中央教育審議会 [2005] 「我が国の高等教育
の将来像」答申
7. 橋本鉦市、石井美和 [2004] 「ボランティアと
自己実現の社会学——その接合にみる言説・政
策・理論・個人」『東北大学大学院教育学研究
科研究年報』53(1)、87-119 頁
8. 原義彦 [2015] 「大学の社会貢献機能の位置
づけ把握の試み」『日本生涯教育学会年報』36、
日本生涯教育学会、57-73 頁
9. 広崎純子、酒井朗、千葉勝吾、風間愛理
[2006] 「NPO 活動におけるボランティアの学
びと成長：高校生の進路選択支援活動に携わ
る学生を事例に」『お茶の水女子大学子ども発
達教育研究センター紀要』3、113-122 頁
10. 松永典子 [2017] 「留学生はボランティア活
動をどう意味づけているのか——地域社会参
加、キャリア形成との関連から——」『地球社会
統合科学』23 (2)、1-11 頁
11. 羅明振、荒木勝、栗原考次 [2012] 「大学生
の社会貢献地域連携に対する意識」『岡山大学
環境理工研究報告』17 (1)、7-21 頁